



当別 TOBETSU 140 年の歴史

蘇る その2

開拓 30 年から 60 年
(明治後期～昭和初期)

札幌支庁管内第一の農村へ。
そして災害とのたたかいはつづいた。



明治 40 年建築の当別村役場

■役場庁舎を新築

当別村は明治 35 年 (1902) 4 月 1 日より戸長役場制度から 2 級町村制の村に昇格、当時の規模は世帯数 1,675 戸、人口は 8,013 人と記録されています。

開墾事業は順調に進み、田は約 360ha、畑は約 5,230ha に達し、札幌支庁管内 (当時) 第一の豊かな農村を呈していました。初の村会議員選挙では 12 人が選出され、村内各地の人口増加で全村を 11 部落 (翌年に 15 部落) に分けるなどまちづくりも充実してきました。そして明治 40 年 (1907)、役場庁舎が西小川通に新築されました。

このころ石狩川、当別川の氾濫が村人たちを悩ませていました。中でも明治 31 年 9 月 6 日から 3 日間降り続いた大暴風雨で石狩川はあふれ、当別太、ピトエー帯は氾濫し水位は 2.4m から 2.7m にも達し水没する家が続出、この地域だけでも 240 戸以上が屋根に登って助けを待ちました。その後も明治 37 年、42 年と水害は続き、43 年にはやっと石狩川の治水工事が開始されました。

■米づくりへの挑戦

明治 5 年の入植当時より米づくりが試みられています。しかし鹿などの動物に食い荒らされ、本格的に米の作付けが行われたのは明治 14 年、約 1ha の田んぼで収穫が行われました。しかし明治末期になると地力が衰え始め、道庁の政策により道外からの大地主が土地の払い下げを受けて小作農場を始めるなど、農業は大きな転換期を迎えていました。

大正 2 年 (1913) の当別土功組合の創設や昭和 2 年 (1927) の太美土功組合設立までの 15 年間は最も盛んに造田が行われ毎年 300ha の水田を拓きました。水稻栽培の普及は農家の収入を安定させ、大正 7 年の収穫は米が 82 万円 (現在の約 4 億 8 千万円)、エンバク 49 万円、亜麻 20 万円と記録されています。大正 9 年 (1920)、新築された当別尋常高等小学校で「開村五十年」を祝う記念式典が開催され、村内外から 1,000 人が参列しています。この年の第 1 回国勢調査では 2,305 世帯、1 万 3,191 人で、開拓の手が及んでいなかった不毛の原野まで水田化が進んで行きました。

石狩川治水工事の様子



■農業の危機

昭和4年(1929)、村では村内農家の負債調査を行ったところ1戸当たりの負債総額は832円で全国平均を1割以上上回っていました。この年の世界恐慌は、日本経済を根底から揺るがし、企業の倒産、賃金カットが相次いでいました。昭和5年は米価が大暴落し半値まで落ち込み、6年・7年・9年・10年と大凶作が続き、8年は平年作でしたが全国的には大豊作が災いし、米価は大暴落となり農家経営を直撃しました。

政府は農村救済のため産業組合育成策を打ち出し、昭和8年、合併した村内の4産業組合により、米価対策のため、道内最大級のレンガ造りの倉庫(現在のふれあい倉庫周辺)が建設されました。

参考文献

当別町史(1972年)

新とうべつ物語「写真でつづる120年(1991年)」

※昔の金額を現在の貨幣価値に換算するため、日本銀行の企業物価および消費者物価の上昇率から算出していますが、あくまで参考の数値です。

本町の開拓の節目を迎える今年、広報では特集を組んで、過去の歴史や市街地や地域の今昔、人々の生活などをお伝えします。

次号では昭和初期～現在まで、を予定しています。また、太美地区や青山など地域別に情報を集めています。当別町の歴史に関する古い写真やエピソードをお持ちの方は是非ご連絡下さい。

■情報課広報広聴係 ☎23-3069

「米の産地・当別」。 農業の安定と経済交流の活発化。

■鉄道のはじまり

長年の念願であった軌道事業は、石狩川による工事の難しさから実現が伸びていましたが、町内の経済人が出資して株式会社を設立し、昭和2年、当別と江別を結ぶ江当軌道が開通しました。旅客輸送のほか砂利や、当別川を使って流送されてくる木材の運搬を行い、始発駅は現在の幸町「つじの蔵」裏手あたりで、終点の石狩大橋付近までの旅客運賃は45銭(現在の価値で約300円)でした。

国鉄(当時)の札沼線の敷設には石狩・当別・月形・新十津川・雨竜・北竜など石狩川右岸の8ヶ町村が大正元年より幾度も政府へ請願書を提出し、当別～札幌間が昭和9年に開通しました。これにより江当軌道が7年余りの短い役割を終えました。札沼線の石狩鉄橋は全長1,074mで、当時は全国で3番目の長さが話題を呼びました。札幌市への交通の便は飛躍的に良くなり、人口も増加し市街地も広がりました。

札沼線の開通祝賀パレード

昭和9年11月20日と思われる写真には駅舎が付近より1m以上高く盛土していることが分る。駅構内には機関車の給水施設もあり、昭和25年開通の青山方面への簡易殖民軌道や中央バス4路線との連絡、政府管理米の輸送など、乗客や、貨物取扱で賑わいを見せた。



当別町 140 年特別企画

第2話 消防の今昔物語

① 当別の消防はいつからか？

下の写真は、大正15年に寄贈された米国製ノーザン式ガソリンポンプ35馬力自動車の納入時の写真です。このポンプ車は村の有志により寄贈され、付属品を含めた総額は15,000円、現在の価値で約1千万円で、昭和23年まで活躍しました。

住民の生命と財産を守る消防組織かのけいぞうの創立は明治43年、鹿野恵造氏ほか、村の有志が火災予防組合ひのみやぐらの設立に向けて奔走したことに始まります。しかし予算的にも機器の不十分を整備するためには公設消防組こうせつしょうぼうぐみの設置が必要と考え、大正元年11月に設置の申請を行い、翌2年4月24日北海道庁に公示され、公設消防が誕生しまし

た。この時の組員は、組頭くみがしら1名、小頭こがしら2名、消防手30名で編成され、また、当時の建物施設（写真後方の建物）は現在の当別郵便局近くのパークハイツ大町の位置にあり、火見櫓ひのみやぐら、木材の移動や消防作業に使われる鳶口とびくちや防火用の桶、ドイツ製腕用ポンプ1台が装備品でした。



大正15年、初の消防自動車に10名が自動車隊として増員された。

私設消防組から公設消防へ、
戦時下では防空業務など
役割は大きく変化した。

消防団のシンボル「纏」、
組の目印であり、士気の高揚を図るもので、江戸時代の町火消しの名残です。

当別村（私設）消防組の設置

| 名称 | 設置年 | 区域 | 組員数 |
|--------|-------|---------|-----|
| 太美消防組 | 大正10年 | 当別太、美登江 | 45名 |
| 弁華別消防組 | 大正15年 | 弁華別 | 65名 |
| 対雁消防組 | 大正15年 | 対雁通 | 35名 |
| 金沢消防組 | 昭和4年 | 金沢 | 35名 |
| 東裏消防組 | 昭和4年 | 東裏 | 45名 |



消防組（公設消防）設立記念（大正2年4月24日）背後は伊達邸

② 消防組織の変遷

公設消防はその区域を市街地中心4kmとされていたため、周辺集落では大正10年以降、5つの私設消防組が設立されます。これらの組織の中核は地域の青年団組織であり、消火器具の購入、運営費用は地域住民が賄っていました。その後、時代は戦争の暗雲が

濃くなって行きます。国では空襲による火災、避難、救護、監視などを行う民間防衛の重要性から「警防団令」が昭和14年1月に公布されました。同年4月1日には町内にあった公設、私設の消防組は当別警防団として1本の組織として吸収統合され、女子団員も加わり防空訓練や村民の指導に当たるようになります。

平和が戻った昭和22年8月、警防団は消防団に改組され、従来の公設制度から290人の定員を擁する自治体組織として生まれ変わりました。また、戦時下での警察的役割を分離し、消防の責任行為として火災予防、警戒、消火設備、消火活動、火災調査など広範で強力な役割を担っていきます。



③当別町消防本部、事務組合の設置へ

この頃までの消防は災害が発生してから出動していましたが、昭和26年の当別大火を機に常備消防を望む声が高まり、昭和38年4月20日、当別町消防団のほかに当別町消防本部（本部長は当別町長）が発足、消防吏員8名が増員されて常備消防の体制が整いました。

しかし、石狩北部4町村（当別町、新篠津村、厚田村、浜益村）でみると当別だけが常備消防を備え、自治省消防庁では消防体制の強化策として広域化を指導していたことから、昭和45年10月1日には4町村（当時）による石狩北部地区消防事務組合が誕生しました。その後、昭和47年4月1日に石狩消防署が加入しています。

参考文献

当別消防80年のあゆみ（1994年）
当別町史（1972年）

■情報課広報広聴係

☎ 23 - 3069

当別町最大の火事が発生

昭和26年9月9日12時10分
西小川通58番地（現在の北洋銀行駐車場）付近から

江別、新篠津、月形、札幌の各消防の協力のもと延焼防止に集中して3時間30分後に鎮火、的確な判断がなければ、現在の北成建設の位置にあった当時の農協へも

出火後、付近の住民は避難行動を始める。駅の機関車用給水場からも消火ホースがひかれた。（現在のスナック瀬里奈付近から当別駅方面を撮影）



延焼し、さらに消失区域は広がったと報じられています。

27世帯が焼け出され損害額は3千3百万円、幸いにして死傷者はありませんでした。



（出火当時の略図）

インタビュー



平出理三郎さん（昭和26年火災当時は市街地に在住）
当時高校生

出火当時は友達と当別小学校グラウンドで野球をしていました。サイレンを聞き、家のすぐ前から火が見えたので急いでバケツを持って行きましたが、熱くて近寄れませんでした。走る消防車に団員が次々と飛び乗って集まり、消火活動が始まりましたが風が強くなりまらずいと思いました。周りの家では家財道具を持ち出し逃げる準備をするかわら、屋根に登って降ってくる火の粉を払うんです。当時はトタン屋根は珍しく^{まきぶき}桤葺屋根ですから火の粉が落ちるとすぐ燃え出すんですよ。今では石油ストーブで火の管理も安全になり、トタン屋根や防火建築により火災も減ったんでしょうね。



延焼する出火場所付近